

2025 年 5 月 31 日（土）

直島新美術館 開館！

開館記念展示—原点から未来へ



撮影：GION

公益財団法人 福武財団（香川県・直島 理事長：福武英明）は、**2025 年 5 月 31 日（土）10:00** に、**直島新美術館**（館長：三木あき子 設計：安藤忠雄）を**開館**します。

1980 年代後半から直島を拠点に活動を開始したベネッセアートサイト直島は、自然・建築・アートの共生、地域との協働によるコミュニティの発展などを念頭に、複数の美術館やアート施設群を展開し、離島において世界的にも類をみない特別な場を形成してきました。35 年を超える活動を経て新たに開館する直島新美術館は、集落のなかに位置し館名に初めて「直島」を冠した、安藤忠雄設計の 10 番目の施設*です。同館は、日本を含めたアジア地域のアーティストの作品を展示・収集し、一部展示替えや各種パブリック・プログラム等を通して、より多様な視点や表現、時代や社会に対する多義的なメッセージを発信するとともに、人々が繰り返し訪れ、島内外の多種多様な人々が出会う交流・連携の場となることも目指します。

開館を記念する展示が同日スタートし、日本、中国、韓国、インドネシア、タイ、インド、フィリピン、マレーシアなどアジア地域出身の 12 名/組のアーティストによる、この場所にあわせて構想されたサイト・スペシフィックな新作や代表作を公開します。

*ベネッセアートサイト直島における安藤忠雄建築のアート施設で 10 番目

開館記念展示—原点から未来へ

開館記念展示では、ベネッセアートサイト直島の初期から関わりのあった作家や、2016年以降ベネッセ賞をヴェネツィアからアジアへ移行したことをきっかけに関係性を築いてきた作家、さらには近年の現地調査で出会った作家等12名/組による、代表作やこの場所にあわせて構想された新作が、地下2階、地上1階の複数のギャラリー空間やカフェ空間等に展示されます。

アートが内包する私たちの生きる時代や社会・環境への鋭い眼差しや問いかけを通して、真に「よく生きる」について考察すること—直島から始まった活動の原点にあるこの思いを改めて確認し、アジアのアーティストたちの作品が放つ様々なメッセージが、未来への希望の手紙となることを願います。

「直島新美術館 開館記念展示—原点から未来へ」

会期：2025年5月31日～（一部は2026年2月以降に展示替え予定）

■アーティスト一覧（姓のアルファベット順） ※経歴は別紙参照

会田誠（Aida Makoto） | 1965年 新潟県生まれ 東京都拠点

マルタ・アティエンサ（Martha Atienza） | 1981年 マニラ（フィリピン）生まれ バンタヤン島（フィリピン）拠点

蔡國強（Cai Guo-Qiang） | 1957年 泉州（中国）生まれ ニューヨーク（アメリカ）拠点

Chim ↑ Pom from Smappa! Group | 2005年 東京都で結成 同地を拠点に活動

ヘリ・ドノ（Heri Dono） | 1960年 ジャカルタ（インドネシア）生まれ ジョグジャカルタ（インドネシア）拠点

インディゲリラ（indiguerillas） | 1999年 ジョグジャカルタ（インドネシア）で結成 同地を拠点に活動

村上隆（Takashi Murakami） | 1962年 東京都生まれ

N・S・ハルシャ（N. S. Harsha） | 1969年 マイスール（インド）生まれ 同地拠点

サニタス・プラディッタスニー（Sanitas Pradittasnee） | 1980年 バンコク（タイ）生まれ 同地拠点

下道基行+ジェフリー・リム（Shitamichi Motoyuki + Jeffrey Lim） | 1978年 岡山県生まれ 香川県・直島拠点、1978年 クアラルンプール（マレーシア）生まれ 同地拠点

ソ・ドホ（Do Ho Suh） | 1962年 ソウル（韓国）生まれ ロンドン（イギリス）拠点

パナパン・ヨドマニー（Pannaphan Yodmanee） | 1988年 ナコーンシータンマラート（タイ）生まれ バンコク（タイ）拠点

■展示作品について

ギャラリー1

マルタ・アティエンサ：自身が拠点とするフィリピン・バンタヤン島に取材した映像作品です。経済発展の名目のもと観光産業に左右されてきた島の歴史を踏まえ、抑圧的システムに対抗する上で土地に根ざした記憶の継承が重要との考えから、映像を通して島の文化を伝えています。

ヘリ・ドノ：海、山、森などの自然風景のなかに作家がこれまで制作してきた彫刻、インスタレーション、パフォーマンスの要素が組み込まれ、数十年にわたる画業とその背景にあるインドネシアの近現代史等が反映された10枚組絵画大作などを展示しています。また、天井から吊るされた、魚雷を抱えた天使像は、自国において言論の自由が制限されていた時代に言及しつつ、未来の構築のために夢見る自由、想像する自由の大切さをあらためて唱えています。

ヘリ・ドノ & インディゲリラ（合作）：いかにアートが異なる考えをもつ人々を繋ぎ、調和をもたらすことができるかを強く訴える作品です。ジャワの伝統的な皮革製の人形劇やカートゥーンといったモチーフを組み合わせ、多様性の美しさや人類の繁栄についての思索を促します。7点の作品には、自然への敬意、共生や協働などに関するメッセージが込められています。

パナパン・ヨドマニー：第11回ベネッセ賞を受賞した本作は、仏教的な宇宙観と近代科学、日常との関係から、変化や開発、進展、破壊といった意味について考察を試みる巨大な壁画・彫刻インスタレーションです。

ギャラリー2

ソ・ドホ：「Hub」シリーズは、ソウルやニューヨーク、ロンドンなど作家自身が暮らしてきた家の玄関や廊下などを布で再現したソ・ドホの代表的作品。同館のための作品構想の過程で訪れた直島の民家の廊下部分を新たに加えた 8 連作は、本シリーズの長期展示としては最大級のものとなる。人生にはいろいろな通過点があることを悟った作家自身の経験に基づく私観的な作品であり、鑑賞者はその中を移動することで、国内外の人が行き交う直島での経験や自分自身の記憶を振り返りながら、その構造物にそれぞれの意味を見出すだろう。

ギャラリー3

Chim ↑ Pom from Smappa!Group：「Sukurappu ando Birudo プロジェクト」（2016～）の一環で、東京・高円寺キタコレビルに制作された《道》。ビルの解体を見据えた移設構想のもと、「輸送中」の状態を展示します。アスファルトや路盤材に用いた建築廃材——戦後期や1964年の東京オリンピックに象徴される高度経済成長期、バブル期のもの——が時間の層を成し、タイムカプセルのように収められた輸送コンテナや、移設計画の青写真等を通して、「作って壊された」ものたちの「スクラップ」から自らの手で未来を「ビルド」することの可能性を示唆しています。

村上隆：近世京都の名所や市井の暮らしを俯瞰で描いた屏風絵 岩佐又兵衛筆《洛中洛外図屏風・舟木本》（17世紀、国宝）を参照した 13 メートルの大作です。2024 年、京都での個展における初披露を経て、さらに手が加えられました。生活の様子が緻密に描かれた画面上では、2,700 人もの人々に加えて、DOB 君やカイカイとキキら村上隆のキャラクターたちも京都の街を闊歩しています。華々しい都市とそこを満たすドクロの金雲は、賑やかな都人の裏側にあった戦の動乱や様々な災害などを想起させ、生と死、明と暗が隣り合って存在しているという現代にも通じる普遍的なメッセージを発しています。

会田誠：2008 年より様々なかたちで展開しているシリーズ「MONUMENT FOR NOTHING」の最新作です。「日本という国がどのように変質したか／しつつあるか」というテーマのもと、1990 年代から現在までの約 30 年間を中心とした過去の日本における、メディアによる膨大なイメージの記憶を辿るかのごとく巨大な彫刻モニュメントを作り出しました。忘却に抗い、回想するための装置のようでもあり、「なんらかのあり方による再生への希望」を投影したものでもあるといえます。

ギャラリー4

蔡國強：2006 年、ベルリン・グッゲンハイムでの個展のために制作された、99 体の精巧な狼の群れが全力で走り、ためらうことなくガラスの壁にぶつかる大型のインスタレーション《ヘッド・オン》を中心とした展示です。ベルリンの壁と同じ高さのガラス壁は人と人、異なる集団の間に存在する、見えないが確かにあるイデオロギーや文化の隔たりを象徴し、壁にぶつかり続ける狼の姿は、人類が特定の集団意識に過度に従属し、過ちを何度も繰り返してきた運命を思わせます。このような変動の時代において、本作はあらためて鋭く問いを投げかけます。

エントランス

下道基行 + ジェフリー・リム：瀬戸内海地域の景観、風土、民俗、歴史などの調査、収集、展示を通してアーカイブ空間を創出する、下道基行が展開する「瀬戸内「 」資料館」プロジェクト（2019～、直島・宮ノ浦）のサテライト展示です。2024 年、「直島における人々の出入り＝“流動性”」に着目し、ジェフリー・リムとともに直島諸島の漂着物からボックスカメラを手づくりし、直島の風景の中で撮影した直島町民の家族写真と、会期中に撮影された町民らの写真を改めて紹介しています。

多目的カフェスペース「&CAFE」

N・S・ハルシャ：屋外と屋内、島内外の様々な人びとが交流する開放的なカフェ空間にあわせて、幸福感のある場所を作り出すべく、人間が生きる上で重要な、内側に目を向ける「内観」と外側に目を向ける「外観」の2つのビジョンの融合を結婚式に見立て、色彩豊かな絵画のコラージュを構想しました。3面の壁には、それぞれ「結婚式」「調理」「食事」の様子が描かれており、インコはその模倣能力から、人間が自然を模倣し、自然から学んできたことを示すメタファーとして人と自然の関係の考察を促します。

屋外

サニタス・プラディッタスニー（2026 年完成予定/完成に先んじて瞑想ワークショップを実施）：島内に点在する「直島八十八箇所」に敬意を抱き、禅の公案である「隻手の声一片手で鳴らす音を心耳をもって聞く」という経験を通じてのみ理解できるマインドフルネスの状態から着想した、瞑想体験に誘うストウパ（仏塔）を中心とする展示を美術館

屋外で展開予定です。完成に先んじて、仮設のパヴィリオンが現れ、折々に瞑想ワークショップを実施します。



左上「直島新美術館 開館記念展示—原点から未来へ」展示風景、2025 年 撮影：来田猛

右上：蔡國強《ヘッド・オン》2006 年 撮影：顧剣亨

左下：ソ・ドホ《Hub/s 直島、ソウル、ニューヨーク、ホーシャム、ロンドン、ベルリン》2025 年 撮影：来田猛

右下：N・S・ハルシャ《幸せな結婚生活》2025 年 撮影：来田猛

■展示のみどころ

1. アジア地域出身の著名アーティストから新進気鋭による、代表作やその場所にあわせた新作

蔡國強や村上隆、ヘリ・ドノ、ソ・ドホ、マルタ・アティエンサなど、著名アーティストから新進気鋭のアーティストまで、世界で活躍する幅広いアーティストたちによる絵画、彫刻、映像、インスタレーションといった多様な作品で構成されます。ベネッセアートサイト直島を牽引してきた名誉理事長の福武総一郎が未来のために伝えたいメッセージを体現する作品群として厳選した作家の代表作と、この場所にあわせて新たに制作されたコミッション作品を中心にご覧いただけます。

2. 直島の暮らしと響き合う、サイト・スペシフィックな新作など

自身が暮らしてきた居住空間を模った作品に直島の民家の廊下部分を新たに加えたソ・ドホの代表作「Hub」シリーズや、島内外の様々な人びとが交流する場所としての多目的なカフェ空間にあわせて N・S・ハルシャが描いた異なる視点の融合、人と自然との関係を示唆する幸福感に満ちた絵画インスタレーションだけでなく、マルタ・アティエンサが拠点とするフィリピンの島の文化を伝える映像や下道基行 + ジェフリー・リムによる島民の写真などを通して、島の営みやリズムと共鳴する展示を体感いただけます。

3. 安藤建築と呼応する、メガスケールの代表作

本展示では、インドネシアを代表するヘリ・ドノの数十年にわたる画業が反映された 10 枚組の大型絵画など、作家の代表作を新しい安藤建築の空間でご覧いただけます。46 万人が来場した 2024 年の村上隆の京都での個展で初公開された 13 メートルの大作《洛中洛外図 岩佐又兵衛 rip》は、新たにキャラクターや金箔などが加えられました。また、2006 年にベルリンで発表されて以降、グッゲンハイム美術館など世界各地の主要美術館で展示され大きな話題となった蔡國強の代表作のひとつ《ヘッド・オン》は大空間で展示されます。

■オープニングトーク「アーティストトークマラソン」

当館は、作品の収集・展示とともに、パブリック・プログラム等を通して、人々が繰り返し訪れ、島内外の多種多様な人々が出会う交流・連携の場となることも目指しています。

5月31日には開館を記念して、参加アーティストたちが作品について語るトークマラソンを開催します。

※5月31日の入館予約チケットが完売のため、トークへの新規参加はできません。

日時：2025年5月31日(土) 11:00-16:00 (予定)

会場：直島新美術館 & CAFE

司会進行：三木あき子 (当館館長)

参加費：無料

予定スケジュール

11:00 ソ・ドホ

11:30 N・S・ハルシャ

12:00 休憩

13:00 インディゲリラ

13:30 Chim ↑ Pom from Smappa!Group

14:00 会田誠

14:30 下道基行+ジェフリー・リム

15:00 サニタス・プラディッタスニー

～15:30 終了※予定

施設基本情報

名称：直島新美術館

開館日：2025年5月31日(土)

住所：香川県香川郡直島町 3299-73

電話番号：087-892-3754 (福武財団) ※美術館へのお問い合わせは一般問合わせ先メールアドレスへご連絡ください

開館時間：10:00～16:30 (最終入館 16:00)

休館日：月曜日 (ただし、祝日の場合開館、翌日休館)

※不定休あり。ベネッセアートサイト直島ウェブサイト開館カレンダーにて随時更新。

鑑賞料金：オンライン購入 (日にち指定) 1,500 円/窓口購入 1,700 円/15 歳以下無料

※瀬戸内国際芸術祭 作品鑑賞パスポート対象施設

駐車場：一般車両 (20 台)、自転車 (15 台程度) いずれも無料

施設 URL：<https://benesse-artsite.jp/art/nnmoa.html>

一般問合わせ先：info-newmuseum@fukutake-artmuseum.jp

5/31・6月入館分：発売中 ※5/31 入館分は完売

7月入館分以降：2 か月前の第 2 金曜 10 時～

チケット販売：ベネッセアートサイト直島 美術館予約サイトにて

<https://benesse-artsite.jp/general-information.html>

関係者メッセージ

福武總一郎（公益財団法人 福武財団名誉理事長）

直島新美術館ではアジアの現代美術を中心に展開します。それは今後アジアの現代美術がさらに興味深いものになっていくだろうという期待のほかに、日本は地政学的にも文化的にもアジアの一員であることを意識していくべきだと考えているからです。私にとってのアジア的な感性とは、人間も自然の一部にとらえ、自然と共に生きる姿勢です。これまでの欧米のコレクション作品は既存のアート施設において展示され、日本を含むアジア地域の現代美術は直島新美術館で展示されることによって、ベネッセアートサイト直島全体としてみればバランスのとれた展示の展開になるのではないかと思います。

福武英明（公益財団法人 福武財団理事長）

これからの活動を発展・深化させていくために考慮すべきことは“つなぐ”ことで、これには二つの方法があると考えます。一つは、これまでつくられてきた個々のインパクトのある美術館や作品のあいだをつないでいく、ということ。直島新美術館は、“動き”を促す連携の拠点の役割を担うことになると思います。そして、連携の“動き”や“循環”をつくる主体は、やはり“人”です。もう一つは、さまざまな協力者と多様なつながりを今後は深めていくということです。アーティストや建築家の方々だけでなく、志や思いを共有できる方々と新たに協業・共創していくことがベネッセアートサイト直島の活動の継続性を支え、活動の価値を高めることになると思います。

安藤忠雄（建築家）

直島での体験は、ここを訪れた人たちの記憶に永遠に残るものだろうと思います。子どもの頃に聴いた音楽や鑑賞した芸術はいつまでも記憶に残っています。多くの子どもたちが直島を訪れることによって、新しい世界を切り開いていくような感性を磨いてもらいたい。私は“感動”こそ、人間を育てる大きな力だと考えていますが、感性を磨くことは、この“感動”の機会を増やすきっかけなのです。直島は、この“感動”を喚起させる類のない島であり、直島新美術館の建築もまた、人々の感性を育み、“感動”を生むものであると信じています。

三木あき子（直島新美術館館長）

欧米や日本のアーティストの恒久作品展示が主であったベネッセアートサイト直島の「美術館・アート施設群」に、アジアの現代アートに焦点をあて、展示替えなどの「動き」を持つ美術館が加わることで、より多様な作風に触れていただくとともに、繰り返し人々が訪れることのできる環境を整えます。そして、集落内にある初の美術館として、地域に根差しつつ世界に開かれた直島らしい美術館の在りようと、アートと建築、自然、コミュニティの調和・融合のかたちのさらなる探求とともに、常に活動の原点に立ち返る拠り所となるよう尽力していききたいと思います。

直島新美術館の建築について

建築は、1992 年開館のベネッセハウス ミュージアム以降、30 年以上にわたり直島の数々の建物を手掛けてきた安藤忠雄氏が設計を担当しました。丘の稜線をゆるやかにつなぐような大きな屋根が特徴的な建物は地下2階、地上1階建てです。トップライトから自然光が入る階段室は地上から地下まで直線状に続いており、階段の両側に4つのギャラリーが配置されています。地上フロアの北側にはカフェを併設し、瀬戸内海を臨むテラスから、豊島や行き交う漁船など、瀬戸内海らしい景観を眺めることができます。直島の集落内に初めてできる美術館建築のため、外観は本村の集落の景観になじむよう、焼杉のイメージに合わせた黒漆喰の外壁や本村の民家から着想を得た小石が積まれた塀などが特徴的

Benesse Art Site Naoshima | PRESS RELEASE

ベネッセアートサイト直島 プレスリリース 2025.5.30

で、美術館までのアプローチや建築からも直島の歴史や人々の営みと体験が緩やかに繋がるようデザインされています。

直島新美術館（※ベネッセアートサイト直島における安藤忠雄設計による10番目のアート施設）

設計：安藤忠雄建築研究所

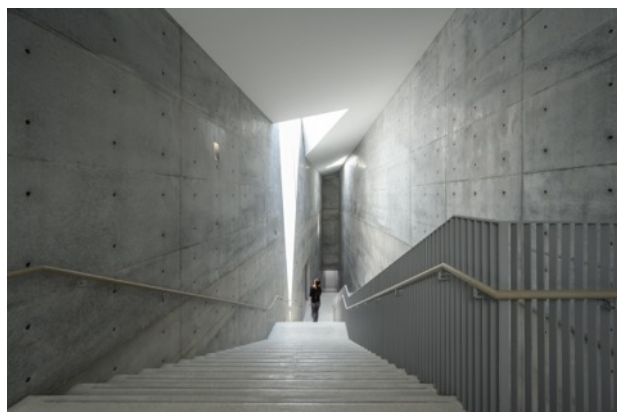
建築：地上1階、地下2階の3階建て、カフェ併設

敷地面積：7945.90㎡、延床面積：3,176㎡

ギャラリー：（1）373㎡、（2）300㎡、（3）320㎡（4）494㎡ カフェ：144㎡（キッチンを除く）※小数点以下四捨五入

設立・運営：公益財団法人 福武財団（香川県・直島 理事長：福武英明 / 名誉理事長：福武総一郎）

館長：三木あき子



撮影：GION



添付資料

■ロゴについて

直島新美術館の和文ロゴは、サイズが小さくても大きくても可読性のある明朝体です。これは、小さなサイズでも可読性があるようにと昭和16年（1941）頃から新聞で使用されているふところの大きな書体で、モニター表示のときのサイズ変化に囚われずに可読性が高いという理由もあってモニター表示にも適した明朝体です。また、縦と横の太さの差を少なくすることで文字のサイズが小さくても可読性が保たれるようにしています。そして、「直」の文字は福武財団の発足時に用いていた最終画がなめらかな「直」です。また、欧文フォントは、字送りが同じになるように合理的に設計されたスラブ系のタイプライター用書体です。和文・欧文とも数百年先を見据える直島新美術館のロゴとして、どのような変化にも対応するロゴにしました。（祖父江慎）

直島新美術館
NAOSHIMA NEW MUSEUM OF ART

祖父江慎：1959年、愛知県生まれ。アートディレクター、コズフィッシュ代表。並はずれた「うっとり力」をもって書籍や展覧会のデザイン、グッズのブランディングなど幅広いジャンルのデザインを手がけている。地中美術館、豊島美術館のロゴ、スノーピーミュージアム東京のアートディレクション、ミッフィー展、エヴァンゲリオン展、さくらももこ展、北斎展など多くの展覧会を手掛ける。

■ベネッセアートサイト直島とは

「ベネッセアートサイト直島」は、直島・豊島（香川県）、犬島（岡山県）を舞台に株式会社ベネッセホールディングスと公益財団法人福武財団が展開しているアート活動の総称です。

瀬戸内海の風景の中、ひとつの場所に、時間をかけてアートをつくりあげていくこと——各島の自然や、地域固有の文化の中に、現代アートや建築を置くことによって、どこにもない特別な場所を生み出していくことが「ベネッセアートサイト直島」の基本方針です。各島でのアート作品との出会い、日本の原風景ともいえる瀬戸内の風景や地域の人々と触れ合いを通して、訪れてくださる方がベネッセホールディングスの企業理念である「ベネッセよく生きる」とは何かについて考えてくださることを目指しています。

そして、活動を継続することによって地域の環境・文化・経済すべての面において社会貢献できるよう、現代アートとそれを包括する場である地域がともに成長し続ける関係を築いていきたいと考えています。

■ベネッセアートサイト直島の歴史について

参照 URL：<https://benesse-artsite.jp/about/history.html>

■全作家プロフィール

会田誠 1965年新潟県生まれ、東京都を拠点に活動。社会や歴史、現代と近代以前、西洋と東洋の境界を自由に往来し、常識にとらわれない対比や痛烈な批評性を提示する作風で知られる。絵画、写真、映像、立体、パフォーマンスなど多様な作品で国際展や国内外の美術館での企画に参加する傍ら、近年は小説やエッセイ集などの執筆も手がける。主な個展に「天才でごめんなさい」（森美術館、東京、2012年）、「考えない人」（プルターニユ公爵城、ナント、2014年）などがある。

マルタ・アティエンサ 1981年マニラ（フィリピン）生まれ、バンタヤン島（フィリピン）を拠点に活動。オランダ人の母とフィリピン人の父の間に生まれ、異なる文化の間で育つ。主に環境、コミュニティ、開発に関する問題を記録し疑問を投げかける映像作品等を発表。それらは地域の伝統、人間の主観性、自然界の間の複雑な相互作用を研究する生態学的、社会学的関心に根ざし、社会変革の触媒としてのアートの可能性を示唆する。アジア・パシフィック・トリエンナーレ（2018年）やイスタンブール・ビエンナーレ（2022年）など国際展の参加も多い。

蔡國強 1957年泉州（中国）生まれ、ニューヨーク（アメリカ）を拠点に活動。大規模な爆発イベントや火薬絵画、インスタレーション等で世界的に知られ、近年は拡張現実、ブロックチェーン、人工知能等の新技術にも取り組む。東洋哲学と現代の社会問題に根差した作品は、土地固有の文化や歴史を解釈し、鑑賞者と大宇宙との対話を生み出す。数多くの国際展やグッゲンハイム美術館等主要美術館での個展に加え2008年、2022年の北京オリンピックの開会・閉会式の視覚特効芸術および花火の監督も担った。1995年ベネッセ賞、1999年にヴェネツィア・ビエンナーレ国際金獅子賞、2007年にヒロシマ賞、2012年に高松宮殿下記念世界文化賞絵画部門賞、米国国務省芸術勲章を受賞。

Chim ↑ Pom from Smappa!Group 2005年東京都で結成された卯城竜太、林靖高、エリイ、岡田将孝、稲岡求、水野俊紀によるアーティスト・コレクティブ。同地を拠点に活動。都市問題や移民、震災、境界、公共性など、時代のリアリティに反応し、現代社会に鋭く介入する多様なプロジェクトで知られる。そのラディカルな表現は時に賛否両論を呼びつつも、既成の概念や社会に一石を投じ、国内外で評価を得る。美術館や国際展での展示だけでなく自主企画も多く手がける。主な展覧会に「ナラッキー」（歌舞伎町王城ビル、東京、2023年）、「Chim ↑ Pom：ハッピーズプリング」（森美術館、東京、2022年）、「Threat of Peace (Hiroshima!!!!!!)」(Art in General、ニューヨーク、2019年)、Manchester International Festival (2019年) などがある。ポンピドゥー・センター、グッゲンハイム美術館など国内外の美術館に作品が所蔵される。

ヘリ・ドノ 1960年ジャカルタ（インドネシア）生まれ、ジョグジャカルタ（インドネシア）を拠点に活動。絵画やキネティック彫刻等の作品は、伝統的な影絵芝居ワヤン・クリ等の伝統的表現と現代の手法が融合、土着の物語のイディオムと空想上の怪物や獣等のキャラクターの多用によるブラックユーモア、不条理性に満ちた物語性と政治風刺が特徴的である。2015年にヴェネツィア・ビエンナーレインドネシア館代表。1998年にPrince Claus Fund Award、2000年にUNESCO Prize、2014年にインドネシア政府によるAnugerah Adhikarya Rupa（インドネシアン・アート・アワード）を受賞。

インディゲリラ ミコ・バウォノは1975年クドゥス（インドネシア）生まれ、サンティ・アリエスティオワンティは1977年セマラン（インドネシア）生まれ。現在ジョグジャカルタ（インドネシア）在住。夫婦によるアーティストデュオ。デザイナーとしての背景を持ちつつ「新しい可能性を見つけるための、絶え間ないゲリラ戦」という哲学のもと、2007年から本格的なアーティスト活動を開始。洗練された視覚効果とインターメディアの試み、インドネシアの伝統的な世界観と現代文化を融合させる独自の表現で知られる。シンガポール美術館などに作品が収蔵されるほか、パブリックアート作品も多く手掛ける。

村上隆 1962年東京都生まれ。日本の伝統美術とアニメ・マンガの平面性を接続し、戦後日本社会の在り様にも批評的に言及した現代視覚文化の概念「スーパーフラット」を提唱。自ら生み出したDOBやKo²ちゃん等、おたく文化を反映したキャラクターを用いた絵画や彫刻、グッズ等を通して、ハイカルチャーとポップカルチャー、芸術と経済といった既存のヒエラルキーや境界を解体・超越する独自の領域を開拓し続けている。数々の世界の主要美術館における個展開催に加え、自らキュレーションした「リトルボーイ展」（ジャパン・ソサエティ、ニューヨーク、2005年）が全米批評家連盟ベストキュレーション賞受賞。2008年『タイム』誌が選ぶ「世界で最も影響力のある100人」に選出される。2015年に文化庁「第66回芸術選奨」文部科学大臣賞受賞。

N・S・ハルシャ 1969年マイスール（インド）生まれ。同地を拠点に活動。絵画、彫刻、インスタレーションなど多様な表現を通して、南インドの伝統文化や自然環境、都市化による社会の変化、不条理、グローバルとローカルの関係などについての詩的かつ哲学的な思索を発展させる。労働や食事、睡眠といった人間の「生」を、ミクロの世界と宇宙的なマクロの視点とつなげて考察する独自のヴィジョンで世界的な評価を得ている。横浜トリエンナーレ（2011年）、サンパウロ・ビエンナーレ（2010年）を含む多数の国際展の他、「N・S・ハルシャ展」（森美術館、東京、2017年）での個展等各地の美術館で展示。2008年にアルテス・ムンディ大賞受賞。

サニタス・プラディッタスニー 1980年バンコク（タイ）生まれ、同地を拠点に活動。現代アート制作のほか、ランドスケープ・アーキテクチャー・デザインも手掛ける。信仰や宗教に関連する建築の中の形、質感、空虚な空間に興味を持ち、鑑賞者との相互作用を促すような建築・彫刻的作品で知られる。「アートは人々の意識を刺激するコミュニケーションの一形態である」という信念のもと、空間の文脈や素材の意味を深く研究し、仏教の「無常と空虚」の原則を反映した作品は、深い内省のための空間を提供し、鑑賞者が自分の内面と再びつながることを促す。バンコク・アート・ビエンナーレ（2018年）、タイランド・ビエンナーレ（2024年）等に参加。

下道基行+ジェフリー・リム 下道は1978年岡山県生まれ。香川県・直島を拠点に活動。フィールドワークをベースに生活の中に埋没して忘却されかけている物語や日常的な物事を、写真や映像、収集等の手法で編集し視覚化。代表作に日本国内の戦争遺構の現状を調査する「戦争のかたち」（2001-2005年）、日本の国境の外側に残された日本の植民／侵略の遺構を探る「torii」（2006年-）等がある。ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展日本館（2019）など国内外の展覧会参加や出版活動に加え、人々との協働やラーニングプロジェクトも多数行う。

リムは1978年マレーシア生まれ。同地を拠点に活動。文化活動家としてカルチュラル・マッピング、写真を用いたソーシャル・アート・プロジェクト等に取り組む。2012年より廃材等で手作りしたボックスカメラでポートレートを撮影し、取材や調査を通してその地域や人々の多様性を調査・記録する「Kanta Project」をマレーシアやボルネオ島、台湾、日本で実施。その他、文化調査や記録、アーカイブ、後継育成を目的としたプロジェクトや、ワークショップ、ロードツアーを通して、制作の技術や知識を広めることにも注力する。

ソ・ドホ 1962年ソウル（韓国）生まれ、ロンドン（イギリス）を拠点に活動。彫刻やドローイング、映像など様々なメディアを用いて、家という概念、物理的空間、移動、記憶、境界、個人と集団の関係性等に関する問いを探究し続けている。ヴェネツィア・ビエンナーレ韓国館代表（2001年）だけでなく、数多くの国際展に参加。テート・モダン（2025年）など主要美術館での数々の個展開催に加え、作品は国際的なパブリックコレクションやプライベートコレクションに多数所蔵されている。

パナパン・ヨドマニー 1988年ナコーンシータンマラート（タイ）生まれ、バンコク（タイ）を拠点に活動。拾い集めたオブジェ、岩石や鉱物などの自然の要素、タイの伝統美術や建築を想起させる絵画の要素を組み合わせ、仏教哲学と私たちの生活との関連性を考察し、仏教哲学と宇宙観を探究。タイの伝統美術に特徴的なデザインやモチーフを用いて、喪失、苦悩、荒廃、死と再生のカルマのサイクルという普遍的なテーマに取り組む。アジア・パシフィック・トリエンナーレ（2018年）やリヨン・ビエンナーレ（2019年）等多くの国際展に参加。2016年に第11回ベネッセ賞受賞。